お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)
光文社　出版局

長編推理小説　**Wの悲劇**

昭和57年2月5日　初版1刷発行
昭和57年3月30日　9刷発行

定価600円

著者　夏樹静子
名古屋市名東区高社1-95

発行者　大坪昌夫

印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2-21-12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替　東京6-115347
株式会社　光文社
電話　東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(関川製本)
表紙の模様・意匠登録　116613
©Sizuko Natuki 1982
(分)0-2-93(製)02457(出)2271(0)
Printed in Japan

長編推理小説

Wの悲劇

夏樹静子

カッパ・ノベルス

目次

第一章　湖畔の人々　7
第二章　雪の中の序幕　31
第三章　ひたすらの防禦　52
第四章　秘やかな暗示　76
第五章　内部犯の構図　105
第六章　忍びよる跫音　133
第七章　崩された防壁　155
第八章　陰の誘導　176
第九章　闇の中の終幕　206
解説　エラリー・クイーン　235

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

エラリー・クイーン氏とローズ夫人に捧ぐ

主な登場人物

和辻家

- （長男）与兵衛（66歳）和辻薬品会長
  - ＝ みね（62歳）
  - ＝ 道彦（42歳）生物学教授
- （長女）妹（亡）―淑枝（45歳）―摩子（22歳）女子大生
- （次男）弟（亡）―卓夫（28歳）和辻薬品秘書室社員
- （三男）繁（60歳）和辻薬品取締役

間崎鐘平（34歳）外科医

一条春生（25歳）摩子の家庭教師・劇作家志望

中里右京（40歳）富士五湖警察署刑事課長

鶴見三郎（43歳）県警本部特捜班長

相浦克平（53歳）富士五湖警察署署長

本文のイラストレーション

吉原澄悦

第一章　湖畔の人々

1

一月三日――。

正午に新宿を出る御殿場行き特急電車あさぎり号は、発車する時には大部分の座席が乗客で埋まっていた。同じころに別のホームから出た箱根湯本行きも、ほとんど満席のようだった。元日、二日を東京ですごし、今日から四日の日曜にかけて箱根の温泉につかってこようという観光客であろう。

が、御殿場行きに乗った人々の多くは、明治神宮などの初詣で帰りなので、電車が町田に着くと半分以上が降りていった。こちらの沿線には、とりたてて観光地や温泉場もない。御殿場の先には富士山と富士五湖が控えているのだが、冬はオフ・シーズンに当たる。電車が終点に近づくころには、乗客は二割がたしか残っていなかった。

東京は快晴の乾燥した天気だったが、松田をすぎてから空が雪雲に蔽われ、午後二時に御殿場へ着いた時は、小雪が散らつき始めていた。

すいた車輛から一人で降りてきた一条春生は、冷えきった風にマフラーの中で首をすくめながらも、どことなく懐かしい眼差しで、ホームの古ぼけた屋根や柱を眺めた。

駅の建物も、昔ながらの木造の平屋だった。改札口を出ると、三角屋根の下の時計が二時三分を指していた。

（こんなのが〝駅舎〟という呼び名にふさわしいんだわ……）

さして広くもない駅前広場にも小雪が舞い落ち、向かい側には土産物店と小さな旅館が並んでいた。旅館の軒下で、注連飾りが寒そうに風に揺れている。

電車から降りた人影は、思い思いの方向へ散っていった。スキーやスケートの若者グループも、まだシーズンには早いせいか、思いのほか少なかった。

数台のタクシーと乗用車が、広場の上を廻るように移動している。空のタクシーが春生の前で停まりかけたが、彼女は軽く首を振って、駅の左手のほうへ歩いていった。〈バス乗場〉の看板の矢印がそちらを指していた。

あちこちへ行くバスの多数の標識が並んでいた。二、三台が停まって、排気管から白い煙を吐いている。

和辻摩子のいる山荘へは〈旭日丘行き〉に乗ればいいと、教わってきた。御殿場まで誰か家の者に車で迎えに行かせると摩子はいってくれたが、それも気兼ねなので辞退したのだ。バスに乗る前に、山荘へ電話を入れる約束になっている。

〈河口湖行き〉と〈旭日丘行き〉が同じ標識で示されていた。バスは旭日丘を経由して、富士吉田から河口湖まで行くが、旭日丘止まりもあるらしい。旭日丘は山中湖畔でもいちばんひらけた中心街なのである。

時刻表を見ると、バスは二時間に三本くらいの間隔で出ているようだ。つぎは二時半である。

春生は、ショルダーバッグの中から小銭入れと手帖を取り出し、公衆電話を捜す眼で周囲を見廻した。と、その視野を塞ぐ形で、大柄な男がゆっくりと歩み寄ってきた。

「河口湖へ行かれるんですか」

男はちょっとハスキーな太い声で、口調は気軽そうに尋ねた。がっしりとした体軀に黒のダスターコートを羽織り、顔立ちは荒削りな感じで、唇が厚い。三十すぎくらいか、もう少し上の年齢だろうか。

「いいえ、山中湖までです」と春生は答えた。

「山中湖の、どっち側です？」

少し笑ってまた尋ねながら、相手もそれとなく春生を眺めているのが感じられた。春生は、裏に毛のついたバ

ーバリ風のコートと茶色いインデアンブーツ。ショルダーバッグに小型のボストンバッグをさげたいでたちは、気ままな独り旅を愉しむOLというふうに映ったにちがいない。

「旭日丘ですけど」

「じゃあ、ちょうどいっしょだ。よかったら、ぼくの車に乗りませんか」

彼は駅前広場の外れに停まっているシルバーのスポーツタイプを指さした。ベンツのハードトップで、東京ナンバーだった。

車から男の顔へ戻した春生の視線が、いくらか鋭くなった。こんなふうに誘われることは、必ずしも珍しくはない。とくに、一人で地方を旅している時など、ほんとの親切心から車に便乗させてやろうと声をかけてくれる人に、時折り出くわすものだ。そうとわかれば、こちらも感謝して利用させてもらう。さほどの抵抗を感じないのは、アメリカのヒッチハイクに慣れた感覚からきているのかもしれなかった。とはいえ、誘いを受け入れるのは、あくまで、相手の人柄についての直感的判断が青信号を示した場合に限る。

春生は、一呼吸おいてから答えた。

「ありがとう。でも、バス停までお友達が迎えに来てくれることになってますから」

男は、彼女が手にしている手帖と小銭入れに目を止めて、

「もうそうと決まってるんですか」

「これから電話を掛けるとこですけど」

「じゃあ、真っ直ぐお友達の家まで行くといえばいいじゃありませんか」

「ええ、でも……」

(でも、バス停から山荘へ着くまでの間に、山荘の様子を少しは聞いておいたほうがよさそうだから……)

春生は心の中でそう思っていたが、

「でも、やっぱりバスにしますわ」とだけ答えた。

「そうですか、それじゃあ」

男は少し残念そうに太い眉をひそめ、だが、あっさり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

踵を返した。
彼が運転席へ入り、車が走り出すのを見て、春生は駅のほうへ戻った。銀杏の裸木が一本立っている脇に、黄色い電話のあるブースを見つけたからである。
（今の人は、危険な男だったのか、それとも乗せてもらってもいい相手だっただろうか……？）
春生は車が走り去ったあとの雪で湿りかけた道路を見やりながら、まだちょっと首を傾げていた。時たま、直感の働かない相手にぶつかる。申し出を辞退したことは、それでよかったと思うけれど――。
彼女は電話ブースへ入り、山荘のナンバーをダイアルした。山中湖畔は山中湖村に含まれ、御殿場からでは市外になる。
コールサインが三回鳴って、
「もしもし、和辻でございます」と若い女の声が答えた。摩子ではないから、東京から来ているお手伝いの女性かもしれない。春生は百円玉を穴へ落として、
「あのう、私は一条と申しますけど、摩子さんはいらっしゃいますでしょうか」
「はい、少々お待ちくださいませ」
二、三分もしてから、
「もしもし」と、優しい女の声が呼びかけた。生来の柔らかい声質で、すぐに摩子だとわかった。
「摩子ちゃん？　今御殿場に着いたんですけど」
「あ、先生、お待ちしてましたわ！」
摩子の声が心底うれしそうに弾んだ。
「遅いからどうなさったのかと心配してたんです」
「ごめんなさい。昨夕はシナリオ教室の仲間に麻雀付き合わされて、それで今朝はつい寝坊してしまったの。そちらの仕事は捗ってます？」
「ええ……でも、やっぱり先生に見ていただかないと心配で……」
二時半のバスに乗るというと、旭日丘のバス停までは摩子が迎えに来ると答えた。ここから四十分くらいで着くらしい。
「もうみなさん集まってらっしゃるの」

電話の背後に人声やざわめきを感じて、春生は尋ねた。
「たいてい昨日から来てるんです。まだ会社の秘書室長やお手伝いさんなんかもいますけど、もうじきその人たちが帰れば、今年は全部で八人くらいになるみたいですわ」
「ご親戚の方ばっかりでしょう？」
「ええ、まあ」
「ほんとにお邪魔じゃなかったのかしら、せっかくの水入らずのところへ私が……」
「いいえ、とんでもありませんわ。先生こそせっかくのお正月休みにこんな遠くまで……私がご無理をお願いしたといって、母などとても恐縮してます。でも、来ていただいてよかったわ、ほんとに……」
いかにも安堵した息をついた。
「それじゃあ、遠慮なく伺いますから」と答えて、春生は受話器を置いた。
足許のボストンバッグを持ちあげて外へ出ると、雪がいっそう激しく降り出している。

小型ボストンがずっしり重いのは、中に使い慣れた辞書と英文の原書が二冊も入っているからだった。
和辻摩子は東京の私立女子大英文科四年生。春生のほうは、彼女より三年先輩のまだ二十五歳で、職業は劇作家の卵といったところなのだから、ふつうならとても先生などと呼ばれる立場ではないのだ。ただ、春生はアルバイトで、摩子の英会話の個人教授をしている。それで日頃から彼女には「先生」と呼ばれていた。
摩子はやや複雑な家庭の娘だが、彼女の大伯父に当たる和辻与兵衛は、日本で五指に入る製薬会社、和辻薬品の会長を務め、その社名といっしょに国中に名前が知れ渡っているような人物である。和辻家では決まって毎年正月に、与兵衛があちこちに所有する別荘に親戚縁者が集まり、使用人たちも帰して、二、三日水入らずの休日をすごす習慣があった。今年は山中湖畔の別荘がその場所に選ばれた。本来ならそこへ春生が加わるはずもないのだが、摩子のたっての願いで、急にとび入りすることになってしまった。提出期限を目前に控えた卒論の仕上

げを手伝ってほしいと頼まれたのである。
卒論のテーマはバージニア・ウルフ、主に『ダロウェー夫人』についての考察だった。摩子は、V・ウルフを理解するだけの繊細な感受性は充分に備えているのだが、付属小学校から大学まで同じ私立校にいて、入試の試練をくぐらなかったせいか、語学力が多少不足していた。ところが、英文科の卒論は英語で書かなければならないのである。そのうえ論文提出後に、面接テストも行なわれる。提出日の一月十日に間に合うように、春生に全体を読んで文章の誤りをチェックし、おまけに面接のリハーサルまでやってほしいというのだった。
その突然な頼みがクリスマスすぎだったのだから、摩子は急に自信を失くしたらしい。泣き出しそうな顔で懇願されると、春生は断われなくなってしまった。いや、たとえもっと常識外れな依頼でも、摩子に向かっては拒絶できなかったかもしれない。精神も肉体も、やはり温室育ちのカトレアとでも形容するしかない、純粋でひよわな彼女には、そばにいる誰もが、保護してやらなければいられない気持ちになるようだ。つまりはそんな天性の魅力を、彼女は備えていた。
現に、かなり人間関係の混み入った和辻家のファミリーの中でも、彼女だけはみんなに愛されていることがうかがわれた。
まさしく、摩子は誰からも愛された。そのことが、すべての悲劇の発端となった。

2

バスが出るころには、それでも十人くらいの人々が乗場に集まっていた。
定刻の二時半に御殿場駅前をスタートしたバスが、商店街を抜け、138号線に出た途端に、正面に大きな富士山が聳えていた。およそ雪に被われてはいるが、真っ白というのでもない。暗青色の部分が山頂から縦縞を描き、それが山全体をいっそう峻険に見せていた。
きれいな舗装道路は、ゆるくカーブしながら、少しず

つ上りにかかっていく。富士山はいつでも、フロントガラスの中いっぱいにどっしりとすわっている。今まで新幹線の窓などから遠望していたすんなりとした山とは、ずいぶん印象がちがっていた。もっと逞しくて巨きな富士が、すぐそこに在るという気がする。

富士五湖地方まで来たのだという実感が、にわかに春生の中に湧いてきた。

雪はふいに激しく降ったり、また止んだりしていた。道路沿いには、野菜畑と杉木立ち、時折り裸木の美しい林が現われた。細めの真っ直ぐな幹が空を刺すように屹立しているのは、落葉松にちがいない。樹間には雪が積もっている。ほのかな紅色の西陽が梢に射しかけていた。その先には、やはり富士があり、山裾からまたなだらかな尾根が続いて、屏風のような山々が視野の涯を囲っている。広大な裾野の中を走っていることがわかった。

停留所のたびに、ワンマンバスのマイクがそれを告げ、二、三人の人が降りた。乗ってくる人はほとんどいなかった。

九十九折りの坂がしばらく続いた。まるで最後にそれをしめくくるように、道路が鋭角のカーブを描いて曲がると、その先に切り通しがあり、〈山梨県・山中湖村〉の標識が示されていた。

短い切り通しをくぐった先には〈籠坂峠〉の立て札が見えた。

「海抜一〇一五メートルの籠坂峠でございます。この道は昔、鎌倉街道と呼ばれ、東海道の鮮魚や塩、そして鎌倉や江戸の文化が甲州へ入る近道でしたが、籠坂峠は吹雪の難所として知られていました。間もなくバスは、旭日丘に到着いたします」

テープの女性の声が説明を終わらぬうちに、バスは急な下り坂にかかった。雪がまたいちだんと激しくなり、両側の家々も雪化粧に包まれている。

そこはもう山中湖畔の別荘地らしかった。家々の構造が、これまであった民家とはちがい、それぞれに趣向を凝らしたデザインを競っている。

下り坂の突き当たりに湖水が現われた。坂道は湖畔を

走る道路と直角にぶつかっていた。その角が旭日丘のバス停だった。

座席から立ち上がった春生の目に、バス停の屋根の下に佇んでいる摩子の姿が映った。チェリーピンクのハーフコートの上から、焦茶のストールですっぽり頭を包んでいる。ストールと同じ色のスカートの下に細い真っ直ぐな脚がのぞいて、ヒールの高いショートブーツをはいている。いつ見ても、スリムで華奢なシルエットだ。少し遅れて車内の春生を見つけた摩子は、白い顔をほころばせて手を振った。

降りて来た春生に、摩子が、

「おめでとうございます」とまず新年の挨拶をした。春生もそれに答えた。喋ると息が白くなった。

「寒いでしょう、こちらは」

摩子は気遣うように春生を見あげた。摩子は面長で、細い目とすんなりとした鼻が、どちらかといえば日本風の顔立ちである。口許から顎にかけてのふっくらした輪郭が、ことのほか優しく愛らしかった。

「さすがに冷えこんでるわね。でも大丈夫よ」と答えながら、春生は胴震いした。

「やっぱり車でお迎えにくればよかったかしら……」

「お宅は、ここから歩いてどのくらい？」

「急げば十五分くらいです」

「それならなんでもないわ」

バス道路に面しては、ガソリンスタンドやドライブイン、土産物の商店などが建ち並んでいた。裏通りもあるらしく、この辺が旭日丘の中でも中心の繁華街らしいと察しられた。

「うちはあちらなんです」

摩子が湖水に向かって左手の山側を指さした。

「旭日丘の別荘地帯の西のほうで、とても静かな場所ですけど……」

春生は彼女に従いて、歩道橋を渡り、湖畔の道路を歩き始めた。雪はいよいよ本降りになる様子だ。車はおよそ跡切れなく行き交っているが、歩いている人はほとんど見えなかった。

「湖はもう凍結しているの」
「場所によっては。湧き水のある場所だけは凍らないそうですわ」
湖面は白っぽい濃いブルーをたたえ、ところどころでは、まるで白波を立てながらそのまま凍結してしまったように、波形を描いて静止していた。ワカサギでも釣っているのか、ボートが離れて二艘ほど浮かんでいる。ほかにはスケートをする人影もない。岸辺の枯れた葦が寒寒と風にそよいでいる。物寂しい風情なのだが、その先に聳え立つ富士山が、風景の印象を雄渾とでもいった感じに変えていた。
湖岸にはホテルもあり、門松を飾って、白樺の植えこまれた前庭にはステレオ音楽が流れていた。
「冬間でもお正月だけは泊まり客が来るみたいですわ」と、そのほうを向いて摩子が説明した。
ホテルの前を外れると、また別荘が続いていた。旭日丘では、湖水のある北側をのぞいて、中心の繁華街を別荘地帯が三方から取り囲んでいる恰好のようだ。湖畔のバス道路から、幅数メートルほどの道路がいくつも岐れ出て、そこからまた細い私道が枝のように各戸に通じている。
摩子は、旭日丘の交差点から三本目くらいを、左へ曲がった。湖を背にすると、上り勾配になる。路面は凍った上にうすく雪をかぶり、両側の木の柵にも積もり始めている。道路から外れた場所には、根雪のように厚く積もっていた。
「滑りますから、気をつけて」と摩子が注意した。
別荘は、最初のうちは一軒一軒が割りに接近して建っていたが、上へのぼるにつれて、間隔が離れてきた。敷地の広い、大きな別荘が多くなっているのだろう。家々は瀟洒な西洋館といった趣きが多いが、純日本建築や山小屋風の三角屋根もたまに混じっている。家と家との間には、松、落葉松、樅、白樺などの樹木が植えこまれていた。
山間部の早い夕暮れが近づき、雪雲がひろがったせいで、あたりはほの暗く、冷えこみがきびしく感じられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor